

エンカウンター (ENCOUNTER)

第249号

2023年1月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第2の手紙講解説教」より（5）

パウロの弁明

この箇所（コリント後書第6章1節から10節）は、「使徒の心掛け」、使徒、福音の伝道者というものは、どういう心掛けで、どうあるべきか、ということを書いた場所であります。これは、何もパウロが使徒の心掛け、信者の心掛けを教えるために書いたものではありません。パウロは本当の伝道者でもなく、使徒でもない、という批判に対して、自分の弁解をしている箇所であります。ここに、使徒とはかくあるべきという、使徒の標本とも言うべき生活、またこれは信者の標本とも言うべき生活が展開されています。度々申しますように、コリント人がパウロを疑ったために、その疑いをパウロが福音の為に弁明したことがこのような大きな文字に現れまして、大思想を引き起こしたと言ってもよいと思います。この文章は、原語を読むと、誠に美しい文章であると言われております。オーガスチンも、エラスムスもこの文の麗しさに賛嘆しております。

今は恵みの時、今は救いの日

神はこういわれる、「私は、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救いの日にあなたを助けた」。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である。(コリントⅡ 6・2)

これは、イザヤ書 49 章 8 節からの引用です。パウロは手紙を書いているその時に、「今は恵みの時、今は救いの日である」と言っています。イエス・キリストが十字架にかかり、贖いを成就して、それ故に神との和解ができ、神の子とされて、我々に永遠の生命を頂いたという今は恵みの時である、と。今は、救いが提供されている、と。これを信じて受けてくれと嘆願しているのであります。

忍耐が出来れば、物事は成就する

「この務めがそしりを招かないために、私たちはどんな事にも、人につまづきを与えないようにし、かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。即ち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも、むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、真実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、」(コリントⅡ 6・3-6)

最初に「極度の忍苦(忍耐)」が来ています。私はここに注目すべきだと思います。パウロは非常な忍耐をしましたが、我々には忍耐がない。じきに腹を立てる。大抵の人間は、忍耐については零点です。本当に忍耐が出来れば、物事は成就します。失礼ながら、特にこの頃の若い男女には、この忍耐がありません。学校でこれを教えません。彼らは、それをもって自分の自我を伸ばしていると思っています。思い放題のことをやっています。

「極度の忍耐」とあります。忍耐が出来ないということは、信仰がないということですが。本当に、天国の望みに満ち溢れたら、この世の事で忍耐し得ないことはありません。…この世で忍耐が出来ないで、天国に行けると思ったら、大間違いです。私は信者の中からそういう忍耐のある人が出て来てほしいと思います。…昔から「論語読みの論語知らず」という言葉がありますが、論語の精神を実行できなければ、知識はない方が良いでしょう。聖書の知識も同じことです。

それから、患難、危機、行き詰まり。これは普通の困難です。鞭打たれること、入獄、騒乱。これは迫害を受けることでもあります。労苦、徹夜、飢餓。飢餓とは、自分で断食すること。4 節、5 節は迫害並びに自分の苦難について書いてあります。

6 節、真実が真実。知識は福音の知識、信仰の知識のことです。ここで聖霊が出ております。この「聖霊」が鍵です。「聖霊が臨みて、我が証人とならん」とイエスは言われました。聖霊が臨まなければ、我々に信仰は起こりません。神の霊、これが無ければ、我々にいくら知識があっても、力となって働きません。これは動力みたいなものです。私を含め、大部分の信者はこの聖霊を受けていません。信者になるのはそう簡単になれるものではありません。

キリスト教は、己に勝つ力

真理の言葉と神の力とにより、左右に持っている義の武器により、ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。私たちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、(コリントⅡ6・7-8)

「真理の言葉」とは、「福音」のことです。「神の力」とありますが、人間には力がありません。無力です。口で言っている力はありません。「神の力」が臨む時に我々は、己に克つことができます。実に、キリスト教はアクセサリーではありません。己に克つ力があります。…パウロは、キリストによって、自分は何事でもできると豪語しました。聖霊我に臨む時に、己をコントロールする力が与えられます。…

福音は、人を惑わしているように見える。即ち、イエスは神の子であると言い、神はイエス・キリストによって、罪を赦し給う、神が十字架によって我々と和解し給うて、我々に永遠の生命を与え給う、というように、ちょっと見ると、人を惑わしているように見えます。道徳に反したようにも見えます。しかし、それを味わうときに、それは真実であることが分かっていきます。私は、この「惑わしているようであるが、真実である」という部分は、福音の理解を深く表した言葉であると思います。パウロは、それが真実であることは、わついの生活を見てくれれば分かっていきます。

「見よ、生きている」

人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている。(コリントⅡ6.9-10)

今では、パウロと言えばキリスト教で知らない者はいないでしょうが、当時は、無名の人でした。貧しい着物を着て歩いていたのですから、ほとんど誰も知らないかったでしょう。世の塵、芥のようであったことでしょう。信仰というものは世の中の人には見えません。けれども、神に認められている。また、少数の信者に認められている、と言う。食べる物も食わず、ふらふら裸足で歩いているのですから、死にかかっているように見えたことでしょう。しかし、見よ、生きている。外観は如何にもみすぼらしいが、神によって永遠に生きているのであると言っています。この「見よ」という字は大きな意味を持っています。人間というものは強いものです。地上の名誉、業績が目当てであれば、このような強さは出て来ません。聖書の提供する永遠の生命を受けた時に、「見よ、生きている」と言えるのであります。迫害を受け、懲らしめられ、本当に逃れられない立場にいるけれども、神の恵みがある限り、死なないと言っています。リビングストーンは、人間というものは、天職がおわるまで「immortal (不

死)である」、と言いました。人間は貧乏ぐらいでは死にません。謝礼が少ないというぐらいでは死にません。死にそうであるが、永遠に生きている。信者とはそういう者です。大きな会堂を建て、外見ばかりに気を取られていると、内なる生命力は失われて行きます。

人類二千年の宝を受けよ

我々が本当に復活して、キリストと共同の相続人となることが分かった時点で、自分は、全世界を所有する (possess) と言ってもよい。ロマ書 8 章 30 節にも、未来のことを「栄光を与えて下さった」と書いてあります。人間の尊厳、人に奉仕する力からはここから出て来ます。我々は死ぬまでへこたれないという力がここから出て来ます。歳をとればとるほど、天国が近づいて来ます。いよいよこの力を与える、と聖書に書いて有ります。我々もこの福音をいたずらに受けずに、パウロのこういう生活が本当に展開して来るような受け方を学びたいと思います。パウロは、君達がこれを受けることによって、神の恵みも、私の伝道も、はじめて役立つのである、と言っておられます。ですから、人類二千年の宝は、我々自身がこれを受けるか受けないかによって決まります。神の福音を生かすか殺すかは、我々一人一人の上にかかっています。

祈る、我々各人が、分相応にこの宝を自分のものにする事が出来ることを。

自分の信仰によって幸せであるから説く

日本の将来に楽観は許されません。警戒を要します。民主主義と言っているが、その根本が分かっていません。神への責任が無くして、真の民主主義はありません。自分の考えが一番よくて、他人を退ける傾向があります。非常に注意すべき傾向です。私は、日本において、大なる精神的な指導者が出ることを望みます。現在、本当の指導者はおりますか。人の顔色を見て発言しているようでは駄目です。

私は、皆さんに私の信仰を強制しているわけではありません。ただ、私は自分の信仰によって非常に幸せであるから、説いているのです。それを受けるか受けないかは君たちの勝手であります。

キリスト我と共にあり

わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている。(コリントⅡ 6・16)

神が、こう仰せになっている如く、私たちは、生ける神の宮であるという意味です。次に出て来る神の言葉は、エゼキエル書、サムエル記下、イザヤ書、及びレビ記からの引用です。旧約聖書でこのように言っている如く、我々は神の宮である、という意味です。神が私と一緒に住む。「神我と共にあり」という信仰。これが、旧約信仰の根本です。諸君には、この「神共にあり」という信仰がありますか。新約になって、「キリスト我と共にあり」という信仰に変わって来ます。「復活の主キリスト、我と共にあり」という信仰が無いとすれば、キリスト教の信仰を論ずるに足りません。永遠の生命、復活の生命というものは、この信仰と密接な関係を持っています。また、我々がこの「キリスト我と共にあり」という信仰を持つことが出来たなら、この世のいかなる富よりも、ベターです。これは、見ることも触ることも出来ないもので、信じるほかありません。この教会では、こういうことを説いていません。良いことをせよとか、偉い人になれとか、そういうことは説いていません。それは後からついてくることです。諸君、この信仰を持ちたまえ。

信仰、道徳、どちらにも偏らないのが正当な宗教

パウロは、信仰の話の後に、必ず倫理的な生活を勧めています。我々は、倫理的な生活は嫌ですが、いつも最後にちょっと付いて来ます。……我々が真に福音を理解出来たら、理解相応に我々の生活が変わらなければなりません。変わらなければ、まだ福音が分かっていない有力な証拠になります。「神を畏れる」ということと「神共にいます」ということは、旧約に度々出て来ますが、裏表の思想です。「神を敬い、神を畏れること」は、宗教、道徳の基礎であります。これが無いと、本当の道徳は行われ無いと思います。

私が思うに、仏教浄土門では、道徳をあまり説いておりません。しかるに、浄土真宗の教えを本当に分かった人は、「妙好人」と言って、驚くべき倫理、道徳を実行しています。これは不思議です。私の知っている浄土真宗の先生は皆、どのクリスチャンよりも高い道徳の持ち主であります。自己を捨てた生活をしておられる。キリスト教では、良いことをせよ、人を愛せよ、などと言っているにもかかわらず、徹底していない。諸君、是非これを考えて欲しい。信仰と行いに関する大きなサゼッション(示唆)を与えていると思います。本当の宗教が分かったなら、自分中心から、他人中心の生活になる筈です。私はどちらが良いのか考えているのですが、他人中心的な生活が必要であると説くキリスト教の方が親切のように思います。しかし、道徳、道徳と言うが故に信仰がおろそかになる。信仰、道徳、どちらにも偏らないのが正統な宗教でしょう。

宗教の本領は「永遠」にある

あなたがたはわたしの心のうちにおいて、わたしたちと生死を共にしているのである。わたしはあなたがたを大いに信頼し、大いに誇っている。また、あふれるばかり慰めを受け、あらゆる患難の中にあって喜びに満ちあふれている。(コリントⅡ 7.3-4)

ここに注意したいのは、「私たちは生死を共にしている」という所。宗教の本領は「永遠」にあります。政治、経済はこの世のことだけを論じます。これが宗教と政治・経済との根本的な相違であります。マルクスの経済学は、この世のことを論じます。我々は永遠のことについて論ずる。そして、この永遠をつかんだ者のみが、本当にこの世を支配することができます。…

諸君、キリスト教の信仰は60歳まで捨ててはなりません。分からなくても、60歳まで待ち給え。60歳になれば、少しく味わいが分かって来ます。その時に、我は幸いである、と言える時が必ず来ます。諸君は、今は、キリスト教に疑問があるであろう。分からない所も多いと思う。しかし、60歳まで捨ててはなりません。今私は66歳ですが、幸いです。多分80歳になっても幸いであろうと思います。だんだんわかって来るからであります。諸君、人生の最後になって、幸いであったと言える人になって欲しい。…どうか諸君も、真理を自分のものとするまで捨てないように勧めます。